

## 子どもと保育の情景 (9)

# 片づけの時間

戸田 雅美

ある幼稚園のよく晴れた五月の園庭でのこと。

「四歳児から入園してきた子どもたちもようやく自分のやりたい遊びを幼稚園の中に見つけて遊ぶようになってきたんですよ」という担任の言葉どおり、砂遊びをする子どもや木製の遊具に登って遊ぶ子どもたちの姿は、それぞれ楽しそうに見えた。

十一時も過ぎ、担任が、遊びの山を越した子どもたちから、「片づけをしようか？」と誘いかける姿が見えた。片づいたら、少しみんなで楽しい活動をして、その後にお弁当を食べようという予定らしい。ほとんどの子どもたちは、自分の遊びの区切りをつけて、砂場の道具を片づけたり、担任の用意してくれたたらいの水に足を入れて、足を洗ったりし

始めた。とはいっても、せっかく足を洗ってきれいにしたのに、友達のに誘われて砂場に入ってしまう、また足をたらいに入って洗いなおしたり、せっかく片づけたシャベルをほかの子どもがまた持ち出したり、ということもあって、全体としてはゆっくりと片づいて、子どもたちも少しずつ保育室に入っていく。

片づけもそろそろ終わりに近づいてきたと思うころ、**ようた**が、私にしきりと何か話しかけてくる。ふらっとした感じで近づいてきては、あまりはつきりしない言葉で話すので、はじめは、本当に私に話しかけてきたのか、ということさえ確信がもてない

ほどだったが、何回か聞くうちに「おたまじゃくし、いっぱいいるよ」と明らかに日ごろ見かけない訪問者である私に、おたまじゃくしを見せたいらしいことがわかった。

私気がつくと、ようたは、身を翻すことで私がついてくるように誘った。ようたの示した先には小さな池があつて、そこには小さな真つ黒いおたまじゃくしが本当にたくさん泳いでいた。「わあ、本当におたまじゃくしがいっぱい！」と私が見ていると、急に手を差し出してくる。見ると、ようたの手のひらの上には、おたまじゃくしが一匹。ようたは「まだ、足出でないよ」と足のあたりを指でなでている。きつと私のために教えてくれるつもりなのだろう。けれど、手のひらの上でようたになでられているおたまじゃくしはかわいそうな氣もして「そうだね。でも…」と私がいかけると、五歳児クラスのしゅんすけが「だめだよ。おたまじゃくし、

かわいそうじゃないか。池に入れてやりなよ」とようたに迫ってきた。ようたは、その言葉を氣にも留めていないような様子だったので、ふっと手を池の方に出して、おたまじゃくしを逃がしてやった。しゅんすけもその様子を確認すると、納得した表情で自分の部屋へ戻っていった。

しゅんすけの言葉には、ただ「いけないことは、いけない」ということではなく、日ごろからおたまじゃくしを大事にしている氣持ちがにじみ出ている。その一方で、氣にしないようでも、どこかでその意見に耳を傾けて、逃がしてやることにしたような氣持ちもわかるような氣がした。私はほつとして、その成り行きにこの園の生活を見る思いがした。

ところが、しばらくすると、別の子どもにも目を向けていた私の目の前に、またおたまじゃくしをのせた手のひらが現れた。見ると、ようたが、にこにこ

しながら私を見ている。「おたまじゃくし、まだ足出ないから」と言う。やはり、どうしても私におたまじゃくしのことを紹介したいらしい。その上、  
ようたは指先で、手のひらの上で動いているおたまじゃくしを、なでたりつまんだりし始めた。私は、「本当！ 足はまだみたいだね。ようちゃんはおたまじゃくしとお友達なんだね」とようたの紹介を受け止めた。

しばらくしてもまだおたまじゃくしを触っているので、「でも、しゅんちゃんが、かわいいそうって言うってたよね。やっぱり池に逃がしてあげたら？」と言うと、ようたは私の顔を見ながら笑って、それでもおたまじゃくしから指を離そうとはしなかった。そうこうするうちに、別の保育者が、ようたに片づけを促しに来て、ようたはあっさりとおたまじゃくしを池に逃がしてやっていた。気がつくともうほとんどの子どもが部屋に戻ってしまっている



た。そんな園庭の変化にようたも気がついたのかも  
しれない。

最後まで園庭で遊び続けていたのは、めいだった。ひとり黙々と遊んでいためいは、みんなが片づけていく様子も気にならないというように、スコップを押しして園庭の土を削りながら園庭の端まで行っては戻ってきたりしている。時々スコップにたまった土を確かめたり、自分の後ろにできる線を確かめたりしている。もちろん、保育者が代わる代わる「めいちゃん、お部屋で楽しいことがあるから片づ

「けよう」と声をかけているのだが、どうしても遊びが続けていたらしい。とうとう保育者がつき合つて、そのまま部屋に一緒に入っていくことになつた。部屋に入っためいは、案外さっぱりした表情で、担任や子どもたちが集まっている中に入つていった。

考えてみると、片づけの時間はなかなか難しい。遊びという、自分がやりたいことにじっくりと向き合う時間の心のありように自分なりのまとまりをつけ、新しい時間のはじまりに対する希望へと自身自身を向けていく時間である。

遊びは自分が好きなことを思う存分やるどころに意味がある。遊びにはもちろん、一区切りや山があるとはいえ、本当に意欲的に遊んでいると、一区切りがつけば、次の一山をめざしたくなったり、まだやり足りなかったことがあつたことに気づいてどう

してもやりたいと思つたりする。それが自然である。その一方で、おなががすいたり、保育者やみんなと過ごす時間のおもしろさにも気づいて、それもやってみたいと思つたりもする。そんな心のありようを経験し、自分なりにあれこれ試しながら、動いていこうとする、片づけの時間は、そんな時間なのだろう。

三、四歳児の時期から、保育者の言葉一つで、さつさと片づけだす園もあるらしい。こんな園を見ると、小学校になつたらチャイムで動かなくてはならないのだから、歓迎されることもある。しかし、心のありようが少しずつ違う時間を自分の意思でまとまりをつけながら生きていくことは、人の一生にかかわる大切な課題である。

入園して一か月、ゆつくりと波が押し寄せたり引いたりするような片づけの時間が、園にあることの意味を考えさせられた。

(東京家政大学)